

高校生を対象とした当事者参加型体験プログラムの効果に関する研究 ～ひらめき☆ときめきサイエンス ようこそ大学の研究室へ～ を実施して

高岸弘美¹⁾
村松照美²⁾ 渡邊裕子²⁾ 名取初美²⁾ 茂手木明美²⁾ 相羽利昭²⁾
小尾栄子²⁾ 渥美一恵²⁾ 山北満哉²⁾

要 旨

科学研究費補助金に基づく独立行政法人日本学術振興会の助成を得て、高校生を対象とした当事者参加型体験プログラム「がん治療について一緒に学ぼう！」を実施し、プログラム終了後に、参加者へ質問紙調査を実施した。その結果、本プログラムの内容について「看護に対する興味が深まった」「看護師の役割を知った」「また参加したい」が90%以上であり、がんに対する知識や看護への興味が深まり、効果的なプログラムであったと考えられた。

本調査の結果から、進路選択時期の高校生に本プログラムを実施することによって高校生の看護に対する興味・関心をさらに深め、進路選択や大学における教育や研究を知ることにもつながると考えられた。本プログラムを基礎資料として、高校生の進路選択における大学の関わり方について検討していくことが重要である。

キーワード：ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ がん看護 高校生 科学研究費補助金

I はじめに

ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI（研究成果の社会還元・普及事業）とは、独立行政法人日本学術振興会（以下、学振とする）の委託により、我が国の国公立大学および大学共同利用機関が実施するものである。本事業では、大学の研究室で行われている研究の内容・成果を広く一般の小中学生や高校生を対象に、わかりやすく伝える機会を提供する。また、日本における科学技術研究費（以下、科研費とする）が大学の研究を支援し、研究に貢献していることを世間に知らせるという目的もある。この事業の応募資格は、過去に科研費の研究代表者として研究を実施したことがある研究者が所属しているすべての機関である。

筆者らは、平成19年～21年度に研究課題「化学療法を受けている患者にクライオセラピーの効果に関する研究」（研究代表者：高岸弘美、

平成19～21年度 若手研究(スタートアップ) 課題番号19890178)を基に、この事業に「がん治療について一緒に学ぼう！～副作用って何だろう？～」というプログラム名で応募したところ、全国より252件の応募があり、206件が採択され、本プログラムもそのうちの1つに採択され、実施することができた。

II 目的

本稿では、このプログラムの実施状況や参加者へのアンケート結果から高校生に対する看護への興味の変化を明らかにし、今後のプログラムの在り方を検討する際の一助とする。

III 方法

1. 研究デザイン

調査研究

(所 属)

1) 山梨県立大学看護学部 成人看護学領域

2) 山梨県立大学看護学部 広報委員会

2. 研究方法

本質問紙調査は学振からのプログラムの実施規定により指定があり、実施した。質問紙は無記名とし、以下の2つの内容から構成した。1つ目は、学振作成の指定された書式の質問紙であり、2つ目は学振より各大学で独自に項目を追加するよう指示があり作成した質問紙である。本プログラムの終了時に、参加者に記載してもらい、記入後は出口に設置した回収箱で回収した。配布時に、記入は自由意思に基づくこと、匿名性は確保されることを口頭で説明した。

3. 調査項目

学振が作成した質問紙の内容は、基本属性、所属（公立・私立）、参加しておもしろかったか、プログラムはわかりやすかったか、科学に興味がわいたか、研究者になろうと思ったか、また参加したいか、参加しやすい時期はいつか、プログラムをどこで知ったか、科研費について知っていたか、であった。

筆者らが作成した質問紙の内容は、参加理由、本学への来学回数、オープンキャンパスに来たことがあるか、がんに関する講義を受けたことはあるか、本プログラムをとおして看護に対する興味に変化したか、看護職になろうと思ったか、看護師の役割について知る機会になったか、大学で学ぶことへの関心が深まったか、一番よかったことは何か、印象的なことは何か、であった。

回答は選択肢と自由記載で構成した。

4. 分析方法

調査内容ごとに記述統計を算出した。自由記載は内容について分析を行った。

5. 倫理的配慮

調査の実施に際しては、口頭で調査の目的、意義について説明し、回答者個人が特定されないこと、得られたデータは調査目的以外では使用しないこと、参加は自由であることを説明した。また質問紙の提出をもって調査への同意の

確認とした。本研究は質問紙調査であり、侵襲は皆無であり、参加の自由意思を持って参加の同意とみなしているため、倫理性は担保されていると考えた。

IV プログラムの概要

1. 準備から実施までの概要

本プログラムの準備は、平成21年11月に応募し、平成22年4月9日に採択通知を受け、準備を開始した。大学総務課の科研費担当者が事務を担当した。開催に際しては、日程を看護学部オープンキャンパスと同時開催とし、看護学部広報委員会に企画運営を依頼した。

1) 参加者への周知

学振のホームページに6月上旬より応募専用のページが開設され、公募が開始した。結果的にはホームページからの申し込み者は数名であった。7月下旬開催のため、高校生に向けてのPRを早めに行わなければならない、本学主催の進路説明会、本学ホームページ上での案内、山梨県内、近県への高校への案内状の送付、地元新聞やミニコミ誌への掲載などを行った。申し込みは、事務室へのFAX送信にて行い、学振からの指定により、事前申し込み制とした。

2) 前日までの準備

プログラムを掲載したちらしやポスターの作製は、採択後に速やかに行った。また、当日設置する看板の注文や、高校生に配布する資料等の印刷、クッキータイムのお菓子等の準備があった。また、学生ボランティアを7名依頼し、準備や当日の運営に参加してもらった。

本プログラムの独自性として、療養中である、がん患者の生の声を高校生に聞いてもらい、看護の役割について考えてもらいたいと考えて企画したため、高校生の前で療養体験を話していただける患者様の依頼が最も困難な課題であった。幸いにも、2名の患者様に快諾していただき、プログラムが実施できることとなった。

表 1. 当日のタイムスケジュール

時 間	内 容
12:20～13:30	受 付
13:30～14:30	大学紹介
14:40～15:20	ひらめき☆ときめきサイエンスの紹介
	がんに関する講義
15:20～15:40	ティータイム（在學生との交流）
	当事者（がん患者）からの体験談を聞く
15:40～16:00	大学の施設見学（学部学生の案内による）
	見学をしながら在學生と交流
16:00～16:15	アンケート記入
	修了式
	記念写真撮影

3) 当日の実施状況

平成22年7月24日～25日の2日間にわたり、山梨県立大学看護学部池田キャンパス内の講義室を会場として、高校生を対象として半日のプログラムを実施した。当日のタイムスケジュールは表1に示した。

参加者は本学を志望する高校生、または研究やプログラムのテーマに興味のある高校生であった。1日目が高校生16名、保護者1名、一般の方1名であった。2日目は高校生22名、保護者1名であった。

プログラムの実施にあたり、ボランティア学生を募集し、7名（3年生6名、1年生1名）の協力を得た。参加者には、まず受付を行ってもらい、参加者であることが分かるよう、名札を着用してもらった。本学看護学部に関する説明を受け、その後、本プログラムへ参加した。本プログラムは、学振より講義時間が連続して60分を超えないことという規定が示されており、時間配分についても工夫して実施した。高校生より、申し込みの段階で、「学内（施設）を見学したい」「大学生に相談したい」との要

望があり、要望を受けてスケジュールを検討した。

当事者である患者様に対しては、プログラムの企画の段階から内容について説明し、当日は筆者と当事者の対談形式で進行した。内容は、「がん告知をされた時の気持ち」「日常生活への治療の影響」「治療の副作用について」「看護職をめざす高校生へのメッセージ」という内容で話をしていただいた。

V 結果

1. 対象者の概要

事前の参加申し込み者は、高校生38名（女性37名・男性1名）であった。内訳は、山梨県以外の参加者は2名・山梨県内は36名、また高校1年生2名、2年生4名、3年生32名であった。質問紙の有効回答は38名であった。

来学回数は、平均が 1.78 ± 0.75 回であった。内訳は、1回が14名、2回が22名、3回が1名、4回が2名であった。

表 2. 学振からの質問紙結果

N=38

項目	質 問	回 答	人数 (%)
1	今日、参加しておもしろかったですか	とてもおもしろかった	25 (69)
		おもしろかった	11 (31)
		おもしろくなかった	0
		わからない	0
2	今日のプログラムはわかりやすかったですか	とてもわかりやすかった	27 (73)
		わかりやすかった	10 (27)
		わかりにくかった	0
		わからない	0
3	科学に興味がありましたか	非常に興味がわいた	23 (64)
		少し興味がわいた	13 (36)
		興味がわかなかった	0
		わからない	0
4	研究者からの話などを聞いて、将来自分が研究者になろうと思いましたか	絶対、なろうと思った	1 (3)
		できれば、なろうと思った	14 (39)
		なろうとは思わなかった	7 (19)
		わからない	14 (39)
5	このような企画があれば、また参加したいと思いますか	是非参加したい	18 (50)
		できれば参加したい	18 (50)
		参加したいとは思わない	0
		わからない	0
6	このような企画に参加しやすい時期はいつですか (複数回答可)	夏休み	34 (87)
		冬休み	4 (10)
		土曜日	0
		日曜日	1 (3)
7	このプログラムを誰から (どこで) 知りましたか (複数回答可)	学校の先生	30 (85)
		家族、友達	0
		ホームページ	2 (6)
		広告・ポスターなど	2 (6)
		雑誌	0
		その他	1 (3)
8	科研費についてご存知でしたか	よく知っていた	1 (3)
		少し知っていた	1 (3)
		聞いたことはあった	4 (11)
		今日初めて知った	30 (83)

表 3. 筆者らが作成した質問紙結果

N=38

項目	質 問	回 答	人数 (%)
1	がんに関する講義を受けたことはありましたか	あった	2 (6)
		なかった	21 (60)
		興味はあったが機会がなかった	12 (34)
		その他	0
2	看護に対する興味は変化しましたか	非常に興味がわいた	29 (78)
		少し興味がわいた	8 (22)
		興味がわかなかった	0
		わからない	0
3	看護職になろうと思いましたか	絶対、なろうと思った	29 (78)
		できれば、なろうと思った	7 (19)
		なろうとは思わなかった	1 (3)
		わからない	0
4	看護師の役割について知る機会になりましたか	そう思う	36 (97)
		どちらでもない	1 (3)
		そう思わない	0
		その他	0
5	大学で学ぶことへの関心が深まりましたか	深まった	35 (97)
		どちらでもない	1 (3)
		そう思わない	0
		その他	0
6	参加して一番良かったことは何ですか	入試に関する情報を得た	12 (37)
		大学の施設を見学できた	11 (33)
		模擬講義・体験学習	7 (21)
		在校生との交流	3 (9)
7	一番印象に残ったことは何ですか	がんに関する講義	11 (31)
		山梨県のがん対策について	4 (12)
		患者さんの話	20 (57)
		その他	0

表 4. 自由記載質問紙結果 () は回答数を示す。

参加理由について
・がんについて興味があったから。(19) ・身内をがんでなくしたから (3) ・看護について興味があったから (3) ・高校の先生からの紹介があったから (4) ・志望校での企画だったから (4) ・KAKENHI って何? という興味から。(1) ・大学の模擬講義を受けてみようと思ったから。(1)
参加した感想
・がんについての講義を聴くことができてよかった。知識が深まった。(19) ・患者さんの話が実際に聞けてよかった (4) ・学内の見学ができてよかった (3) ・在校生がいろいろ教えてくれてよかった。対応がよかった。入学したくなった。(3) ・看護への興味が以前よりも深まった (2)
印象に残った場面の理由
・実体験の話 (患者さんからの話) だったから (13) ・知らないことを知ることができたから。(16) ・看護について興味がわいたから (3)
看護学部オープンキャンパスに望むこと
・公開授業 ・患者さんの話を聞くことができる企画 ・大学生との交流 ・部活動体験

2. 質問紙調査結果

学振の質問紙調査結果を表2に、筆者らが作成した質問紙調査結果を表3と表4に示した。

学振からの質問に対しては、「参加して面白かった」「プログラムがわかりやすかった」「興味がわいた」「企画にまた参加したい」という評価が多かった。また、参加しやすい時期は「夏休み」が多く、プログラムについては「学校の先生から」の紹介であった。科研費への認知も参加によって高まっていた。

筆者らの作成した質問に対しては、「がんに関する講義をこれまで受けたことがなかった」者が90%以上で、看護に対する興味が増していた。また、看護職になろうと思った者も多く、看護師の役割について知る機会になっていた。大学で学ぶことへの関心も深まっていた。ほとんどの学生が、患者さんの話を聞いたことが一番印象に残ったと答えていた。

自由回答からも上記と同様の結果が具体的に記載され、看護職を志望した理由なども記載があり、参加者の看護への関心の高さがうかがえた。

VI 考察

1. 本プログラムの効果について

結果から、企画の内容に興味を持って参加した高校生が多く、内容について満足できた様子が感じられた。また、企画への参加を通して、がん看護に対する興味が深まり、看護職への志望や本学への進学についてより関心が深まっていることが分かった。

本プログラムが参加者の満足度を高めた要因としては、対象者の理解度に合わせた講義であったことと、加えてがんの当事者である患者の実際の治療やがんに対する思いを聞くことができて、より看護についての理解を深めることができたことであると考えられる。

2. 高校生の進路選択への大学の在り方について

文部省「中学校・高等学校進路指導の手引(改訂版)」において、進路指導の目標として、「生

徒自ら、将来の進路の選択・計画をし、就職または進学してさらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長すること」と述べられている。進路選択の上で、重要なことは、①個人理解の援助活動 ②進路に関する情報資料獲得への援助活動 ③啓発的経験への援助活動 ④進路相談への援助活動 ⑤進路先の選択・決定への援助活動 ⑥進路先への適応のための援助活動、の6つが重要であるといわれている。²⁾

本プログラムはこれらの6つの中の「啓発的経験」に関連していると考えられ、高校生が大学の実習室を見学したり、患者と交流したり、在学生の体験談を聞いたりする等の自らの体験や経験を通して、自己の適性や能力等を明確化し、将来の進路に役立つ情報を獲得するための諸経験を行うという役割があったと考える。

日本看護協会が全国の9千の医療機関に行った実態調査によると平成17～18年の1年間に推計10万2千人の看護師が退職し、離職率約10%前後ということが報告されている³⁾。また、平成17年の厚生労働省の「第6次看護職員供給見通し検討会報告書」⁴⁾では、平成22年度の需要数は約140万6千人に達するといわれており、看護師の確保は急務である。看護の質、安全を確保するためには質の高い学生を確保し、養成することが重要であるといえる。少子化社会に対応するために高校生や中学生の早期の進路選択に関与することが重要であるといえる。

今回の結果は今後大学がどのように高校生の進路選択に携わっていくかという点を考える際の基礎資料として活用していくことが期待される。

3. 本プログラムの今後への課題

本調査は、本プログラムに参加した高校生を対象としたため、看護や本学に対する興味関心が高い高校生であるため、満足度が高くなってしまうことが偏りとしてあげられる。

看護職の人材確保のためには、早期の進路選択の一助となるため高校1年生あるいは中学生

などを対象として、対象者を拡大できるようなプログラムの検討が必要であると考えます。また、体験学習による効果が今回の結果から大きいことが考えられるため、講義だけでなく実際に体験できる内容、また大学生と交流できるような工夫したプログラムが求められると考えます。

今後の参加者の獲得のためにも、継続してこのようなプログラムを実施していくことで一般に対する大学の研究活動をPRすることや看護に対する理解を深めることに役立つものと考えます。

謝辞

本プログラムの実施に際して、快く参加を承諾してくださった2名の患者様に深く感謝申し上げます。また、ボランティアで手伝ってくれた本学の学部学生の皆様、広報活動・運営に携わってくださった広報委員をはじめとする関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) ひらめき☆ときめきサイエンス：独立行政法人日本学術振興会HP, 2010. 10. 20, <http://www.jsps.go.jp/hirameki/index.html>
- 2) 加澤恒雄：ペタゴジーからアンドロゴジーへ, 76－85, 大学教育出版, 2004.
- 3) 「第2回 看護基礎教育のあり方に関する懇談会」議事録 資料2「看護職員の離職・転職のデータについて」2008年3月：厚生労働省HP, 2010. 10. 20, <http://www-bm.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0303-8.html>
- 4) 「第六次看護職員需給見通しに関する検討会報告書」2005年12月：厚生労働省HP, 2010. 10. 20, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/12/s1226-5.html>

A Pilot Study on the Effect of
an Experience-Based Program ,
“Let’s Study the Cancer Treatment Together”
to High School Students

TAKAGISHI Hiromi

key words: Hirameki ☆ Tokimeki Science, cancer nursing